



教祖百四十年祭

たすけ心でおつとめを



大教会元旦祭（立教 189 年 1 月 1 日）

發行所
天理教芦津大教会
〒 546 - 0003
大阪市東住吉区
今川八丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitushu.or.jp
印刷所 天理時報社

これからのをやのたのみハこればかり
ほかる事わなにもゆハんで 十五号
この事をなにをたのむとをもうかな
つとめ一ぢよの事ばかりやで 十五号

28

27

すけの道としておつとめを教えられ、その実行を促されました。しかし、おつとめをすれば、御身上の教祖が拘留されてしまうため、当時の人々はおつとめを勤めることを躊躇されました。明治20年陰暦正月26日、遂に「命捨てても」との心定めのもと、初代真柱様を芯に白昼堂々とおつとめにかかりました。そのときのおつとめは、鳴物は揃つていませんでしたが、教祖は陽気な鳴物の音を満足気に聞いて、御姿をお隠しになりました。

その後も政府や官憲からの厳しい弾圧、干渉は続き、昭和20年の終戦までは、教祖から教えていただいた通りのおつとめを勤められない時代が長く続きました。おつとめを勤めることができるのは、決して当たり前のことはなかつたのです。

私たちの信仰の中心であり、よろづたすけの御守護の元となる大切なおつとめ。このおつとめなくしてはこの世に陽気ぐらしさは実現しません。私たちも、命懸けでおつとめを勤めてくださった先人に負けないだけの「たすけ心」を込めて、日々、月々のおつとめを勤めさせていただきましょう。

さて今年は、教祖百四十年祭の年であり、また、次の塚へ向かうスタートの年でもある。年祭活動で培ってきた動きを途切れさせることなく、次振り出しに戻ることなく、次に繋げていけるような動きをする年である。年祭活動3年間で培った、おたすけの心をしつかりと継続し、次の塚に向かってのスタートを切らせていきたい。

年祭活動の3年間、「諭達第4号」を拝してより、教祖のひながたを目標に一層の成人を誓い、通り来た道筋は、人それぞれだろうが、つとめた理は必ず自分の足元に芽生え

四方正面

昨年の秋季大祭

『立教188年12月月次祭 挨拶』

おぢばに一手一つの眞実の種を 蒔かせていただこう

大教會長 井筒梅夫

皆様方には、年祭活動三年千日の仕上げの旬の御用の上に、ひとかたならぬご丹精を頂きまして、大変ご苦勞様でございます。

只今は、本年納めの月次祭を滞りなく、共に勇んで勤めさせていただきまして、誠にありがとうございました。思いますところを少しお話しして、12月月次祭の挨拶にしたいと思います。

今年は年祭活動の3年目ですが、最後の一年を迎えるに当たつて、なんとか教祖にご安心いただき、お喜びいただきたいと、各各に成人の心を定めて、この一年を勤めてくださったことだと思います。その成果はさまざまだったと思いますが、精いっぱい勤めたその眞実は、親神様、教祖は間違いなくお受け取りくださっています。

今年も今まで、誠にご苦勞様でございました。これから教祖百四十年祭までのひと月よりも、共に勇んで通らせていただきたいと思います。

さて、今日の神殿講話にもありましたが、私たちは布教活動の一環として、神名流しや路傍講演を行うことがあります。このような外へ向かっての積極的ないがけの最初は、こかん様の浪

速布教です。嘉永6年、父親である善兵衛様のお出直しという大節に遭つて、涙の乾く暇もなく、教祖の御命によつてこかん様は弱冠17歳にして、浪速の地へ神名を流しに出向かれたのです。道頓堀などの繁華街でも、拍子木を打ちながら、にをいがけをされたという話も伝わっています。

ところで、このときの布教でにをいがけがあり、信仰の道につけた人がいるのかと言えば、そんな話は全く聞きません。しかし、このことは何の問題でもないのです。

大切なことは、こかん様が浪速の地で神名を流されたことであり、大阪の地ににをいがけの種を蒔かれたという事実が大切なのです。

それから20年ほどして河内、大阪に道が伝わり、ここ大阪の地で信仰の道が勢いよく伸びていきました。眞明芦津の道も、大阪の地から伸び広がつていったのです。

現在、教会数やようぼく数は、大阪が全教の1割を占めています。全国の都道府県の中では、地元の奈良でもなく、人口が多い首都の東京でもなく、大阪が一番多い。この教勢進展の元は、こかん様が浪速の地に蒔かれたにをいがけの種にあると、私は考えています。

と考えることもできると思うのです。

種を蒔くことは、実に大切なことです。秋季大祭で真柱様は、いましつかり動いたことは、これから先の歩みのための種蒔きであります。無駄になることはないであります。

と、力強く私たちを激励してくださいました。年祭活動も終盤になつて、焦りと迷いの気持ちが起こつては消え、消えては起ころう状態であつた私にとって、このお言葉はどれほどの励みになり、勇みを与えていただいたか分かりません。

百四十年祭を目指して、私たちが一生懸命に勤めていることは、決して無駄にはならないのです。すべてをこれから先の種として、親神様、教祖が受け取つてくださるのです。

これから教祖百四十年祭までのひと月余りを、教祖のためにしつかりと勇んで動かせていただきたいのです。そして百四十年祭には、私たちの一手一つの真実の種を、ぢば、お屋敷に蒔かせていただきたいと存じます。

どうか皆様方の、年祭活動締めくくりの心勇んだご丹精をお願いしまして、挨拶とさせていただきます。

それでは、今月も参拝場でおさづけの取り次ぎをさせていただきたく思います。どうか声を掛け合つて、おさづけの取り次ぎをお願い致します。また、添い願いもおたすけの大切な後押しですから、これもお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願ひ致します。

(要約)

立教百八十八年 十二月月次祭祭文

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教

会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の十全の御守護と深く厚き親心にお護りを頂き、日々恙なく結構にお連れ通り頂きまして、時旬の御用に励ませて頂く中に、今日は早くも立教百八十八年の納めの月次祭を勤める日柄と相なりました。

思い返せば、御姿を隠してまでも可愛い我が子の成人を促された教祖の親心にお応えすべく、三年千日と仕切つて成人を誓い合い始動した年祭活動も、今年はその締め括りの年として、年頭にお誓いした心定めを仕上げさせて頂くべく懸命に努めて参りました。一同、御存命の教祖にお喜び頂きたい一心から、道の進展の上に微力ながらもお役に立たせて頂きたいと、おたすけと丹精に努めて参りましたが、遅々たる歩みにもかかわりませず、温かい親心にお励ましを頂き、日に月に、数々の御守護を頂戴し、節から芽が出来る御守護をも頂きまして、今年も恙なくお連れ通り頂きました、言い尽くせぬ御厚恩の程は、思えば誠に勿体無き限りでござります。お許しを頂きました今日の吉日に、役目にあずかる者一同、心を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、十二月の月次祭を執り行わせて頂き、折柄の寒空も厭わず御前に参き集いました芦津の道の子と相共に、この一年に賜りました厚き御恵みに言改めて御礼申し上げたいと存じます。私共をはじめ、芦津に繋がる教會長、ようぼくは、これからあとひと月、一段と心を引き締め、勇み心に足並みを揃えて、この大切な旬を最後の一日前までとの思いで百四十年祭に臨ませて頂く決心でござります。

何卒、大いなる御守護にお導きを頂きまして、悔いなき年祭活動を勤め抜かせて頂き、感激の教祖百四十年祭を勤めさせて頂けますようお連れ通りの程をお願い申し上げます。茲に本年納めの月次祭に当たり、重ねて今年一年の御礼を申し上げ、併せて来年も変わりなくお連れ通り下さいますよう、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

『立教188年12月月次祭 神殿講話』

親の声に心を合わせると
不思議な働きを見せていただける

まず自ら動いた年祭活動

「いこも二二二元気いへはい
陽気ぐらしの天理教です」。これ
は私の路傍講演の第一声です。年
祭活動に入り、勇んで布教をしよ
うとこの言葉に決めました。

しかし、元気いっぽいと云つて
も勇めない日もあります。勇めない
日は5分も話せず、言葉がうまく
く出てこない日もあります。

あるとき大教会の周辺を戸別訪問に回っていますと、50歳くら

した。こんなとおり、
ひとがなにごといはうとも
かめざみこらざむが

四下り目
一ツ

とのお言葉のお陰で、腹が立つの

「動きましょう」と言つて、自分が動いてなかつたら嘘をついていふことになります。まずは自ら動ることになります。

とがほとんどないということです。そこで手っ取り早いのが戸別訪問です。時間と場所にもよりますが、1時間戸別訪問をして、20件くらいは出てこられます。

朝から神殿掃除、朝づとめ、朝づとめの後にゴミ拾い、神名流し

10時くらいに、にをいかけ。そして、午後1時半にお願いづとめと、今年は1日がとても忙しかったで

親の声を受けて動いたおかげで
今年の秋季大祭での真柱様の神
殿講話で、

三年千日の目標達成へ向けて、いまは、一生懸命つとめておられることがあります。つとめたらつとめただけのご守護は現れてくるのであります。

と仰せられました。

年祭活動は神様のお働きが高まつて
いるときです。そのおかげで、
ありがたいことに御守護を頂きま
した。それは現在、自教会で取り
組んでいる、こども食堂のことで
す。

明治32年7月23日

つて改めて気付いたことは、普段の生活の中で、お道の話をすること

こども食堂は、令和 2 年に私主導で始めました。第 1 回目は、コロナの影響もあり、2 人しか来ませんでした。2 年経つて 30 名ほどになりましたが、それ以上は増えませんでした。

私は料理が趣味で、こども食堂で、手打ちラーメンやピザなどを提供していました。参加してくれた子供やその親からは好評でしたので、なぜ人が集まらないのか、足りないものは何なのかを考えたときに、その当時、他の場所で盛んにやっているこども食堂は女性主導だと気付いたので、令和 4 年



と仰いました。私は、日頃から動いているつもりでしたから、他人事のように受け止めましたが、妻はそれを真剣に受け止めた。

9 月のこども食堂も同じような参加者でしたので、10 月のこども食堂に向けて妻は、私に「チラシを 50 枚作ってほしい」と言つてきました。チラシを作つて妻に渡して、「小学校の校門で配るの?」と聞くと、「校長先生に渡してくれる」のです。私は、「1 宗教団体のこども食堂のチラシを受け取つてくれるわけないだろう」と否定的でした。

でも妻は、チラシを持つて小学

からは妻に主導権を渡しました。では、妻主導でやると増えたのかというと、そうではありませんでした。相変わらず 30 名程度でした。令和 5 年、年祭活動に入つても増えませんでした。

そんな中、その年の 8 月、大教会の全体会議で大教会長様が、コロナ禍の影響もあつたとはいえ、あまりにも動いていなかつた現状に対して「もういい加減、動こう」と仰いました。私は、日頃から動いているつもりでしたから、他人事のように受け止めましたが、妻

は気安く「分かった」と言つて、10 月のこども食堂に手伝いに来てください」と言いました。Aさんは「A さんは 4 人でしたので、Aさんは「4 人何年かぶりに電話がかかってきました。そのとき、妻が「こども食堂をしているので、手伝ってくれないか」と言いました。

小学校では、校長先生がそのチラシを全クラスに配つていただきたいていましたので、それまで 30 人位だったのが、一気に 50 人来てくれました。初めて参加する子も多くいました。

Aさんは「主任児童委員」をされています。主任児童委員とは、各小学校の校区に 2 人くらいいて、問題のある家庭、不登校の家庭などを把握して、訪問などをすることがあります。そして、その月の

こども食堂は、スタッフが私とくと、「受け取つてくれた」と言うのです。

ここから不思議なことが起き始めました。2 日後、娘が小学校のときのママ友である A さんから、A さんともう一人地域の方の 4 人でしたので、Aさんは「4 人でやつてているんですね」と、少ないうい人数でやつていて驚きました。そのとき、妻が「こども食堂をしているので、手伝つてきまないか」と言いました。Aさんは「来月は、お手伝いを誘つてきまます」と言されました。

それから、妻が次の月のこども食堂に向けて、「校長先生に渡すので、チラシを 70 枚作つて」と私に言います。私は「先月は校長先生も地域の人が来たから受け取つてくれたけど、学校には他の信仰をしている人もいたり、反対の意見もあるから、今回は無理だと思うよ」と言つて渡しましたが、今回も受け取つてもらいました。

11 月のこども食堂は、参加者が 60 人を超える A さんが、地域の民生委員さんや、もう一人の主任児童委員さんなどのお手伝いの人を 9 人連れてきてくれました。

それから開催するごとに、参加

子供が、食べに来ていました。そ

れを見た A さんは、私に「岩切さん、良いことされますね」と言

い、感激されました。その日

者がどんどん増えていき、今では100名から150名の参加者が教会に足を運んでくれます。

私の知らないところで勝手に動きました。大したように思えました。大した布教はしていなかつたけど、御守護を頂いたわけです。これが年祭活動の神様のお働きだなと感じました。

また私だけでなく、妻も暇を見つけてはチラシ配り、戸別訪問をし、支部の奥さん方と一緒に路傍講演もよくやつっていました。神名流しは、ショッピングセンターの前で立ち止まっておてふりもしていました。

そして何よりも、事が動きだしたのは、妻が大教會長様の声を受け、「何かしないと」と思い、思い切つて校長先生にチラシを持つて行つてからです。

今では、毎年小学校の校長先生は変わりますが、引き継ぎで、岩切さんのことども食堂の協力をするように言つてくれています。

そして、今年は、ことども食堂の参加者から8名の子供が「ことども

おぢばがえり」に参加してくれました。みんな喜んでくれて、来年も行くと言っています。

教祖が背中を押してくれた

こども食堂のお手伝いが多くなったことは、とてもありがたいことでしたが、あまり多くても手余りで不足を持たれてもいけませんので、自然と私の出番がだんだんなくなりました。

そんな中、参加者と同じようにご飯を食べていたら、高校1年生の女の子が私の前にきて、「会長さんの美味しいラーメンが食べたいな」と言いました。その言葉が頭から離れず、そこで思いついたのが、教会おとまり会に参加したこのある子に声を掛け、そのときを作った料理を提供する「会長の美味しい○○食堂」を開催しようとした。

コロナ前は、教会おとまり会を

親の声に心を合わせると不思議なお働きを見せていただける。そして、この年祭活動は、親神様の繋がるよう活動していただきたいことのある子たちです。おぢばの理を戴いたと感じています。

ありがたいことに、今年そのメンバーから2名別席を運んでくれました。また、こども食堂の日は、そのメンバーがスタッフとして手伝いに来てくれ、本当にありがた

かし、みんな中学生になつたら、部活などで忙しくなり、ぱたつと来なくなります。その子たちにまた来もらいたいと思つて早速、次の月から始めました。

18時に教会に集合して、タブとで話をして、食事をして、簡単なゲームや室内オリンピックなどを20時30分から21時までみんなで遊んでいます。

参加してくれている子は、高校生、大学生、社会人ですが、多くは、こどもおぢばがえりに参加したことのある子たちです。おぢば

この年祭活動もあとひと月となります。まだひと月あります。何かまだできることがあるのではあります。これからは、その子たちが何か人だけに繋がることができないかと考えています。

この年祭活動もあとひと月となります。まだひと月あります。何かまだできることがあるのではあります。これからは、その子たちが何か人だけに繋がることができないかと考えています。

この年祭活動もあとひと月あります。まだひと月あります。何かまだできることがあるのではあります。これからは、その子たちが何か人だけに繋がることができないかと考えています。

十二月月次祭 祭典役割

胡三味琴弓線	小すりがね 太鼓 拍子 鼓 笛 ちゃんばん 木	地方	てをどり	扈者	扈者	祭主
井宗我邦代	岡島きよの	井岡今竹守瀧島川内田本敏秀政義清庄成男治忠一司	加世田奥田湯川正洋	大教會長	山田道弘	大教會長
梶川文子	加吉田幸陽子	梶吉立樋中葭川田花川村内和裕善泰俊隆和三士和浩	石河山川端本健芳義郎雄範	瀧本眞二郎奥田富美子	前半	賛者
木村理恵	河合ふみ子	岡望新吉村梶本月居田田川久慶里裕光和昭太実樹伸人	榎湯奥川田康正信儀	西川正徳	宗我道明	指図方
松山佐金山梶望瀧榎川湯川村田新居西岡浜田奥田西河立竹内花端田英吉敏義芳慶和康正光興宣善芳三洋也生幸明彦征太人亘紀博信伸正実儀郎之						
立川伝供忠洋博						
湯川正園						

立教百八十九年 元旦祭 祭文

この神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教

会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様の深く厚き親心と限りなき御守護により、茲に芽出度く立教百八九年の新春を迎えて頂き、一同寿ぎと共に慎んで御礼申し上げます。顧みますれば過ぎし一年、教祖百四十年祭を目指しての三年千日締め括りの年に、諭達第四号を指針として、時旬の道の歩みの上に努め励んで参りましたが、届かぬばかりの中、おおらかな親心にお抱え頂き、数々の御守護を賜りまして、日に月に恙なく成人の道を歩ませて頂きました言い尽くせぬ御慈愛の程は、誠に有難く勿体ない極みでございます。元旦に当たり、言改めて御厚恩を御礼申し上げ、併せて本年も変わりなきお導きをお願い申し上げたいと、只今から役目にあづかる者一同、勇み心も一人に、鳴物の調子を揃え、座りづとめ、陽気てをどりを勤めて、今年の初づとめを執り行わせて頂きます。御前には年の明けるのを待ちかねて参らせて頂きました芦津の理の子供たちが、共にお歌を唱和し、同じ思いに伏し拌む状を御照覽下さいまして、親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます。

私共をはじめ、芦津に繋がる教會長、ようぼく一同は、年改まり教祖百四十年祭の年を迎えて、誠眞実を結集して年祭に臨ませて頂き、更には次の成人の塚へ向けて、世界たすけの新たな一步を一手一つに力強く踏み出させて頂く決心でございます。至らぬ私共ではございますが、この上共に変わらぬ親心にお連れ通り頂きまして、たすけ一条に心勇んで励ませて頂き、成人の道を恙なくお導き下さいまして、年祭の年に相応しい道の進展と成人の姿をお見せ頂けますよう御守護の程を、年の初めの御礼に併せ、一同と共に慎んでお願ひ申し上げます。

教会でおつとめを勤める意義

人をたすける心で 一つになつて

山名大教長 諸井道隆先生

しつかりとおつとめしなされ

本日の講話のテーマですが、「教会でおつとめを勤める意義」についてです。このテーマをお受けしたときは、内心「難しいテーマだな」と思いました。なぜかと言うと、「天理教教典」には、「教会でおつとめを勤めることの意義」については書かれていないからです。ただ、教会のおつとめは、ぢばで勤められる「かんろだいのつとめ」の理を頑いで勤めるものである、とだけ教えられています。

もちろんこれが答えなのですが、私は若い頃から、それだけでは自分をおつとめに駆り立てるには、何か物足りないよう感じ、心から納得できなかつたのです。その理由として、まず「かぐらづと

なつた。そして、苦しいので、「起こせ」とか、「寝させ」とか言い続けた。講元の端田久吉がおぢばへ帰り、教祖に事の由を申し上げると、教祖は、

「寝させ起こせは、聞き違いやで。講社から起こせ、ということやで。死ぬのやない。早よう去んで、しつかりとおつとめしなされ。」

と、仰せ下された。そこで急いで神戸へもどり、夜昼六座、三日三夜のお願い勤めをしたが、3日目が来てもしるしは見えない。さらに探求したところ、一つのヒントを見つけました。

『逸話篇』に199「一つやで」というお話があります。これは、瀕死になつた本田せいさんが「生きて出直し」をした話です。

眞明組のおつとめ

この方は当時、兵庫眞明組の周旋方の筆頭ともいえるおたすけ人でした。が、49歳のときに脹満が悪化し、一命も危ないという容態に

眠不休であつた。』とあります。これは当時のお願いづとめの様子で、座りづとめと十二下りのてをひとりを一座として、昼に3回、夜に3回、24時間の間に6回勤めてお願いをされていました。

この逸話で私が注目したのは、教祖が講元に「早よう去んで、しつかりとおつとめしなされ」と指示されたところです。瀕死の身上者のおたすけについてご相談に伺つた講元に対し、おつとめを勤めをお願いせよと命じられました。この当時、どの講社でも熱心に勤めを練習し、勤めていましたが、これはすべて教祖の御指示によつて勤められていたという証拠ではないでしょうか。講社時代は、「おつとめを勤めることは、即おたすけ」だったのです。

眞明組のおつとめ

当時の兵庫眞明組のおつとめの様子について、『兵神大教会史』に古老の話が掲載されています。講元が風呂敷に包んだ赤衣の入った箱を背負い、おたすけ先の家に到着すると、赤衣を部屋の上位



置に奉安した後、まず神様のお話を取り次ぐ。次に水行、お供え物を献饌した後、講元が真ん中に座つて、一人で「願い奉る、くにとこたちのみこと様、をもたりのみこと様……」と独唱すると、他の者が声を揃えて「なむてんりわうのみこと」と3度唱和して、礼拝。そして、おつとめを勤めました。おつとめが済むと、講元は病人の側へ行って、赤衣を白木の箱に入つたまま捧げ、「なむてんりわうのみこと」と3度唱和しながら、病人の病んでいる身体の上を、3度撫でるかのように振つて祈願しました。

す。眞明組はとりわけおつとめに熱心で、「眞明の踊り講」と評されていきました。

『眞明芦津の道 卷二』を拝読しますと、まずおつとめの人数を揃え、道具を持つて病人の家に出かけました。一同水をかぶり身を清め、朝三座、昼三座、夜三座のおつとめを、2日も3日も繰り返されました。中には「自分の寿命を〇年縮めて結構ですから、病人をおたすけください」と願われた方もおられました。

当時の先人をそこまで突き動かしたものは何でしょうか？それは「おたすけの喜び」です。講社でおつとめを勤めることは、即おたすけのためでした。講社時代のおつとめは、不完全なものとして思われがちですが、教祖が直接お仕込みくださつて行われていたことであるならば、これが本来の教會で勤めるおつとめの原型、基本形だと、私は思っています。

陽氣づとめとは

私は天理高校出身です。天理高校には「教義科」という授業があります。

う、「これのどこが陽気つとめなんだろう」と、学生の頃、生意気にも思つていました。

そこから、「じゃあ陽気に勤める」ということは、どういうことなのだろうか」という疑問になつたのです。「明るい心でニコニコしながら勤めるのが陽気に勤めることなのか?」でも笑いながら勤めると気持ち悪いよななどと、ずっと疑問に思つていましたが、30歳

が、学生の私にはそう見えたのです。しかも、当時の節回しは陰険旋律で暗かった。暗い神殿で難しい顔をしながら暗いメロディーで歌う。「これのどこが陽気づとめたんだろう」と、学生の頃、生意気にも思つていました。

そこから「じゃあ陽気に勤める」ということは、どういうことなのだろうか」という疑問になつたのです。「明るい心でニコニコしながら勤めるのが陽気に勤めることなのかな?」でも笑いながら勤める

鱗が落ちる思いがしました。

教祖が御在世中に、教祖の代わりにお話を取り次ぐ「取次」と言われた先生方がおられました。その先生方が教祖から日頃聞いておられるお話を書き残したもののが、「こふき」と言われるものです。これには残っているものがいくつもあり、明治16年に書いたものだろうと言われている、通称「こふき十六年本」というものがあります。その中に「陽気づとめとは」という文章があります。

よふきつとめをしてたすかると
いうは、陽氣遊山を見ようとして人間を捨えたる世界なり。よつて元の姿を寄せて、共々勇むるにつき、たすけるものは、ただ、人間はそれを知らずして、人はどうでも、我が身さえよくばよき事と思う心は違うから、このたびのたすけ教えるは、あしきを払いて、陽氣の心になりて願えば、神の心も人間の心も同じこと故、人間の身の内は神のかしものである故に、人間心を勇めば神も勇んで守護すれば、身

の内あしきことはつとめ一条で、よろづたすけするというは、願い人はもちろん、つとめの人衆も真実よりたすけたいとの心を以て願うことなり。

※『ふきの研究』131～132頁参照

3つに分けて説明しますと、まず陽気づとめをして御守護を現わしてくださるとは、もともと神様が陽気ぐらしを見たくて人間、世界をお創りくださった。その元の姿がかぐらづとめであり、元初まりの御守護を寄せ、神も人も共に勇んで勤めるから、たすかりの御守護が現れるということです。

2つ目は、陽気ぐらしが見たくて人間をつくられたという親神様の思召を知らないから、人間は「他人はどうでも、我が身さえ良くば良きこと」と思いがちであるが、その心は違う。このたび神様がたすけ一条の道を教えるからには、あしきをはらい、陽気の心になつて願いなさい。「あしき」とは、「我さえ良くなれば他人はどうでも陽気の心になつて願えば、神様は御守護くださる、という話です。

3つ目、「身の内あしきことはつとめ一条で、よろづたすけ」とは、「なんとかたすけてください」と願っている人はもちろん、つとめの人衆も真実よりたすけたいとの心を以て願うことなり。

この中で大事な部分は、「あしきをはらうて、陽気の心になりて願う」というところです。「あしき」とは、自分さえ良ければ人はどうでも良いという心。それを払つて陽気の心になる。これは人をたすける心のことです。

「陽気」と書きますから、陽気の反対は「陰気」と想像してしまいますが、神様の思召では、陽気の反対は「あしき」ということがこの文章から汲み取れるわけです。

私たち毎月、月次祭を勤めておりますが、祭典が始まる前に皆さんに集まつていただき、会長が挨拶をします。そのときに、「神様からは、もともとおつとめを陽気に勤めるとは、人をたすける心で、おつとめを陽気に勤める心で、皆一つになつて勤める。ここに神様の大事な思召が込められているのではないか」と気付いたのです。

それ以後、いつか自分が教会长を御命いただくことがあれば、そういうおつとめを勤めたいと思つていました。36歳で会長の御命を頂いたのですが、「代替わりをする」と、いろいろな節が訪れる」とおつとめを勤める人衆も、真実よりたすけたいとの心をもつて願う。つまり、一緒に願つて勤める、その心を受け取つて御守護くださるという意味だと思います。

この中で大事な部分は、「あしきをはらうて、陽気の心になりて願う」というところです。T先生は倒れました。3回目の脳梗塞で、周囲も「もう今度

はダメなんじやないか」と言つておりました。大教会でも皆が心配しているのですが、山名大教会は静岡にありますから、T先生は倒れた切り、大教会にお見えになることはありませんでした。皆、心配だけれど、「大変だ」「かわいそうだ」と言つただけでした。

私は毎月、月次祭を勤めておりますが、祭典が始まる前に皆

と一緒にあります。中には、「若い大教会長が急に何を言い出すんだ」という顔をしている方もいましたが、思

い切つて話をして、おつとめを勤めました。

すると、次の月半ばに、その会長の奥さんから「大教会で会長さ

めました。中には、「若い大教会長

が急に何を言い出すんだ」という

顔をしている方もありましたが、思

い切つて話をして、おつとめを勤

めました。

みんなでおつとめを勤めたよつて

うちの主人に話したら、顔がほつ

と明るくなつて、嬉しそうな顔を

した。本当にありがたかつたです

ました。

そこで次の月次祭で、「こういう

手紙を頂きました。今月もお願

いをさせてもらいましょ」と言つて

勤めたのです。前の月よりももつ

きました。そしてまた手紙を頂

きました。

「リハビリが非常に困

難なのですが、本人がリハビリを

したいと言いました。足の感

覚が少し戻ってきたとも言つておられます。本当にありがたいです」と書かれていました。

またそれを月次祭の前に皆さんにお伝えすると、だんだんその気になつてくださいました。こうい

うやり取りを繰り返しているうちに、T先生は1年で自力歩行ができるようになり、とうとう退院することができる、自教会で祭主として祭文を読み、てをどりができるまで回復されました。

おつとめの理は、本当にありがとうございました。身上者がいれどやつてきたことで、当たり前のことなのです。それをさせてもらうと神様は働いてくださるし、教祖もお導きくださる、ということを実感した出来事でした。

おつとめにたすけ心を

また、同じ頃に山形県の教長会で、臍臓がんになつた方がおられました。当時70歳を超えていたのですが、もう危ないということで、このお願ひも添えさせてもらおう

と私が言い出して、おつとめを勤めておりました。その上級教会、上々級教会でも毎月同じようにして

退院されたのですが、半年後、残念ながら出直されました。

その会長さんには息子さんがいて、専修科を出ているのですが、「天理教は嫌いだ」と言つて教会から出て、東京の方に行つてしまつた。会長さんは、そのことを非常に悔やんでおられました。

そして、会長さんが出直されて1ヵ月した頃に、その息子さんから私に手紙が届いたのです。天理教が嫌いだと言つて出て行つたのですから、ちょっとドキッとした。思い切つて開けてみると、お札が書いてありました。

息子さんはたびたび東京から山形にお見舞いに行つたようで、「父は苦しんで闘病していましたが、喜んでいました」とありました。大教会をはじめ、上級教会、みんなが自分のことを神様にお願

書いてありました。

手紙の続きに「天理教がそんな

宗教だと知りませんでした」と

書いてありました。私はこちらに

ものすごいショックを受けました。

子供の頃から教会で育つて、専修

科まで出ていながら、肝心なこと

が全然伝わつていなかつたという

ことです。

しかし、「今回の父のことでの天理教は本当に、互い立て合いたすけ合いのできる人たちの集まりだ

ということがよく分かりました。そういう教えが素晴らしいと思いました。だから教会のことは心配しないでください。僕が必ずやります」と書いてあつたのです。それから数年後、教会に帰つてきて、現在は会長を務めています。

彼は教会に生まれ、専修科で学びながら、何か大事なことが抜け落ちてしまつていたのでしよう。しかし、おつとめでそれを取り戻すことができた。ありがたいと思

うのです。

なさないとのよにしやんしたとて

人をたすける心ないので

これからハ月日たのみや一れつわ
心しいかりいれかゑてくれ

十二号 91

この心どふゆう事であるならば
せかいたすける一ちよばかりを

十二号 92

このさきハせかいぢうハ一れつに
よろづたがいにたすけするなら

十二号 93

月日にもその心をばうけとりて
どんなたすけもするともゑよ

十二号 94

世界中の人都は皆、「幸せになりたい。よくなりたい。いい生活がしたい」と思つて、いろいろ考え、工夫して文明を作つて暮らしてきたい。神様の目から見たら、「人をたすける心がないのが情けない」とおつしやる。そして、心をしつかり入れ替えてほしいと仰せにな

り、神様がとにかく頼むとおつしやるのは「世界たすける一条の心になつてくれ」ということです。

の隣にいる人、家族、地域の人、友達という皆様の周囲の世界であり、周りの方々に少しでもたすかってほしい、困つていればたすけ

たい、その心に入れ替えてほしいということです。そうやって人間が万事互いにたすけ合えるようになつたならば、神様はその心を受け取つて、どんなたすけも現わしてやろうと仰せくださる。

親神様のお望みくださる陽気ぐらしには、私たち一人ひとりが、「自分さえ良ければ、人はどうでもよい」というその心を立て替え、「人をたすける心」にならないと近づかないのです。「あしきをはるうて」と口で唱えながら、心と行動が伴つていないことはないで、正しく鳴物と手振りを勤める。そしてお互いが合わせる心で一手一つに勤めることが、非常に大事です。しかし、それと同時に、形の上ではおつとめを一生懸命勤めている、その魂である「人をたすける心」が入つていなければならぬと思うのです。

教会でおつとめを勤める意義

教会で勤めるおつとめは、親神様の御守護を讃えて御札を申し上げるとともに、「おたすけのための

おつとめ」でなければならぬと思ひます。そしてこの目的意識を会長だけではなく、会長夫人、役員、ようぼく皆が共有して、心一つに勤めることが大切だと思います。

月次祭では会長が祭文を奏上しますが、必ず最後は、「謹んでお願ひ申し上げます」と述べます。これは会長だけのお願いではなくて、教会に繋がる皆さん全員のお願いなのです。互い立て合いたすけ合いの陽気ぐらしを、教会という場所で、おつとめを通して表していくことで、周囲にも伝わるし、子弟たちにも伝わっていく。そのことをこれから大切にしなくてはならないと思うのです。

ところで、教会長になるためには、お運びの前におぢばで「任命講習会」を受講しなくてはなりません。その講習会に「教会実務」という講義があり、教会長の日々の務めについて学ぶのですが、そのテキストには、お願いづとめについての項目がありません。

そこで、私が講義を担当したときは、「朝夕のおつとめももちろん大切ですが、肝心なのはお願いづとめなんですよ」と伝えていました。それはなぜか。お願いづとめは、芯である教会長が切り出さなければ、なかなか誰も言わないのです。会長が言うから、みんな一緒にになって勤めよう、となるわけです。ここが非常に重要です。

これは教会とは違う話ですが、修養科の一期講師で男子クラスの担任を務めたことがあります。その中に70歳ぐらいの方で肺がんの陽気ぐらしを、教会という場末期で余命1カ月と宣告された方がおられました。他にも身上の方はおられましたから、修養科の初日からみんなでおさづけを取り次ぎ、お願いづとめをしていたのです。ところが、日に日に容態が悪くなり、車椅子になつて、肺がんですから息も苦しく、夜も眠れないと、そして期間の半分ぐらいで帰らなければなりません。詰所の方が、毎日苦しんでいるのが見るように耐えなくて、所属の会長さんに迎えに来てもらつたそうです。

その方がお願いづとめをさせても、それはなぜか。お願いづとめは、芯である教会長が途中辞退したその御用に行つたのです。会場である教会の客間で待つていて、面会の方が来られ、見たことのないおじさんが入つてきて、「諸井先生、覚えてますか?」と言うのです。修養科を途中辞退したその方でした。しかもちゃんと立つておられた。当時は顔がむくんでパンパンだつたのが、普通の顔をされていましたから、分かりませんでした。その後の様子を詳しく聞きますと、教会で介護してもらつていていたのが、あまりに苦しむので、病院に「もう一度だけ診てもらえないか」とお願いをしたそうです。検査すると、修養科へ行く前より良くなつて、手術ができる状態になつっていたのです。肺を半分取つたのですが、「修養科のクラスの皆さん、毎日お願いづとめを勤めつたのですが、クラスのみんなに来てくださいたおかげで、生命を繋いでいただくことができた。その人が生きている限り、われわれが修養科にいる限りは、毎日お礼を言いたくて、駆けつけてき

ました」と言うのです。

みんなに声を掛けて、お願ひづ
とめを続けて本当に良かつたと思
いました、おのれの御守護は

いさしておとめの御子、誠に
本当にありがとうございました。

お願い「とめをしよう」と声を掛ける人間は、教会では会長がその役目ですが、会長だけではこうした御守護にはなかなか繋がりません。配偶者である教會長夫人、また役員先生方が皆に、「一緒にお願ひとめを勤めさせてもらおう」と声を掛けることによつて、こういう姿を見せていただき、教会は賑やかな勇んだ雰囲気になるのではないかと思ひます。

おつとめは素晴らしいものです
が、そこに心が伴っているという
ことが非常に大事だと思います。
おつとめに真実の心を込める、真
実の心で勤める。そしてご婦人の
皆様には、皆に声を掛けて、皆の
心をたぐり寄せ、一つにまとめ上
げていく役目があります。

これらを大切にしていただきたいということをお伝えして、本日の講話とさせていただきます。

福田莊分教會長(吉野川部屬)
谷王敬



計報

令和7年11月23日出直された。
享年77歳。

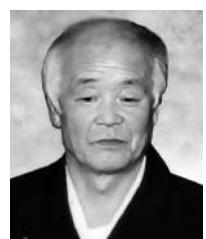
告別式は12月13日、山本繁正・白地分教会長斎主のもと、白地分教会で執り行われた。

昭和23年、父喜井伊太郎、母はるえ夫妻の二男として生まれ、山城中学校卒業後、林業に携わり、山城の山林で働き、林業技術を学ぶ。昭和26年、父の死後、母の手で山城の林業を引き継ぐ。昭和27年、母の死後、山城の林業を引き継ぐ。

ながら信仰を進める。同43年おさづけの理拝戴、同年修養科第322期修了、同48年、15年間無担任であった三馬分教会の四代会長に就任。52年の長きにわたり、その任を全うされた。

平成15年、身上により右半身不随となる中も、上級、上々級へのおつとめ奉仕を欠かすことなく勤め、単身でのおぢば帰りの姿は多くの教友への励みとなつた。

三馬分教會長(吉野川部屬)
喜井三千雄さん



前田英子さん
芦勝分教会長夫人（當別部属）

令和7年12月3日出直された
享年85歳。

告別式は12月5日、山田道弘・當別分教會長斎主のもと、北海道帯広市内の葬祭場で執り行われた。

昭和16年生まれ。同39年おさづけの理拝戴、同年修養科修了、同46年教人登録。

前田弘文会長と共に単独布教同様の状態だった教会を夫人として支え、ひながたを中心の綱として歩み続け、平成27年念願だった教会移転を実現された。

また親の理を重く受け取られ、

常に大教会や上級・當別分教会、北勝分教会に眞実の限りを尽くされた。

(文責
編集部)

